

正誤表

本書中に訂正箇所等がございました。訂正し、お詫び致します。お手数をお掛けしますが、訂正箇所を書き込んでお使いいただきますよう、お願い申し上げます。
 (2011年8月26日作成 2011年8月26日更新)

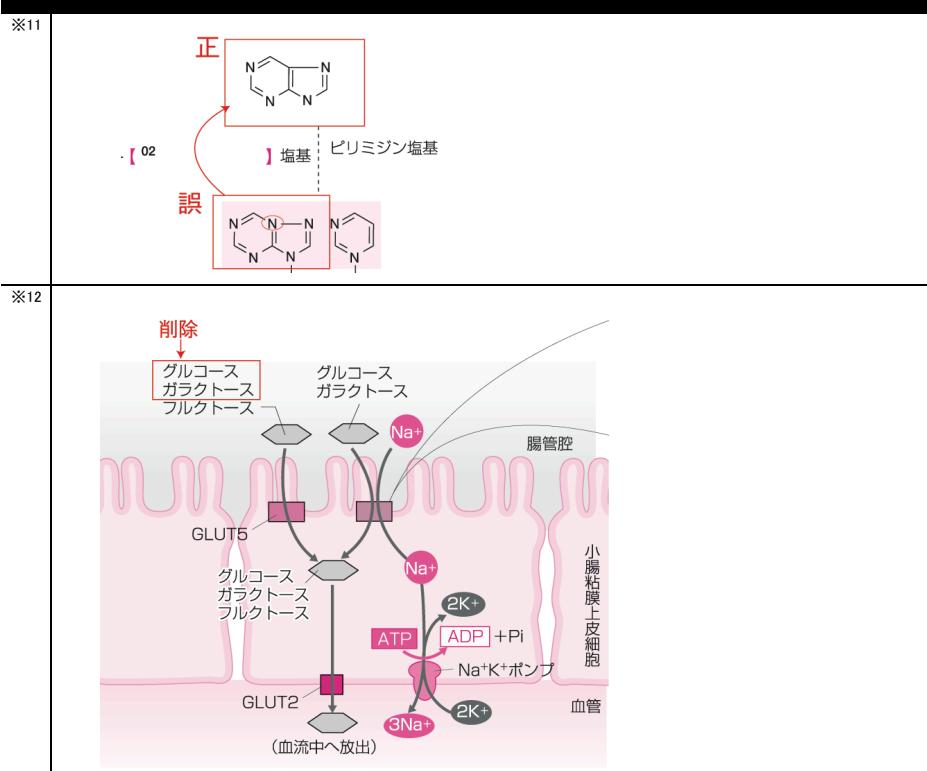
<本正誤表掲載情報>

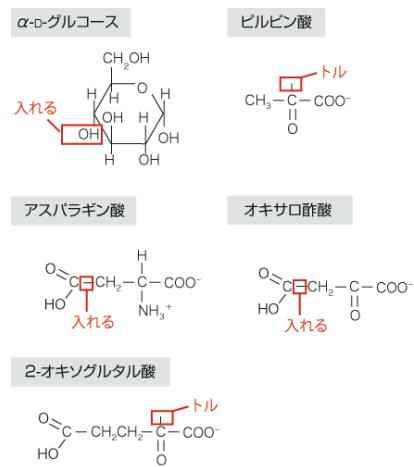
- [P1-2] 第5刷(2011年2月25日発行)をおもちの方が必要な修正箇所
- [P2-3] 第4刷(2010年2月25日発行)をおもちの方が必要な修正箇所
- [P4-5] 第3刷(2009年2月20日発行)をおもちの方が必要な修正箇所
- [P6-8] 第2刷(2008年9月1日発行)をおもちの方が必要な修正箇所
- [P8-12] 第1刷(2007年11月15日発行)をおもちの方が必要な修正箇所

■第5刷(2011年2月25日発行)をおもちの方が必要な修正箇所

頁	場所	誤	正	補足	掲載
15	上から5つ目の●	不飽和脂肪酸とコレステロールは生体膜の[07]を低くする	生体膜中のコレステロールは生体膜の[07]を調節している		11/08/26
51	図1	「N」をとる		※11参照	11/08/26
67	図1	「グルコース」と「ガラクトース」を削除		※12参照	11/08/26
124	Q2のa	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝系 は～	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝達系は～	「達」が抜けていました	11/08/26
126		「 α -D-グルコース」「ビルビン酸」「アスパラギン酸」「オキサロ酢酸」「2-オキソグルタル酸」の構造式に誤りがありました		※10参照	11/08/26

図表

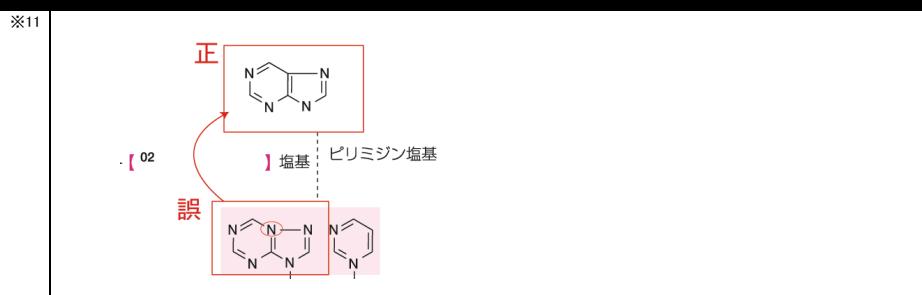




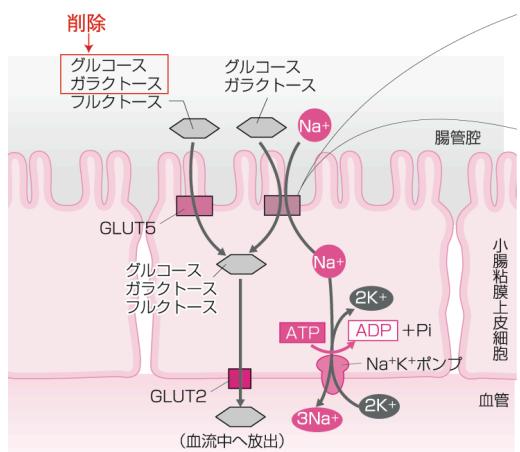
■第4刷(2010年2月25日発行)をおもちの方が必要な修正箇所

頁	場所	誤	正	補足	掲載
15	上から5つ目の●	不飽和脂肪酸とコレステロールは生体膜の【07】を低くする	生体膜中のコレステロールは生体膜の【07】を調節している		11/08/26
51	図1	「N」をとる		※11参照	11/08/26
67	図1	「グルコース」と「ガラクトース」を削除		※12参照	11/08/26
83	表2			※2参照	11/08/26
104	「学習の前に」3行目	純粋なケト原性アミノ酸はロイシンだけである。	純粋なケト原性アミノ酸はロイシントリジンである。		11/08/26
104	表A	「Lys」を「糖原性かつケト原性アミノ酸」から「ケト原性アミノ酸」へ移動		※9参照	11/08/26
105	6行目	●脂質代謝系だけに組み込まれるアミノ酸は【12】だけである。	●脂質代謝系だけに組み込まれるアミノ酸は【12】トリジンの2種である。		11/08/26
124	Q2のa	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝系	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝達系	「達」が抜けていました	11/08/26
126		「 α -D-グルコース」「ビルビン酸」「アスパラギン酸」「オキサロ酢酸」「2-オキソグルタル酸」の構造式に誤りがありました		※10参照	11/08/26

図表



※12



※2 赤枠部分を修正

糖質代謝酵素	作用	活性	結果	活性化剤	阻害剤
グリコーゲンシンターゼ	脱リン酸化	↑	グリコーゲン合成↑	グルコース 6-リン酸	グルカゴン、グリコーゲンなど
グリコーゲンホスホリラーゼ	脱リン酸化	↓	グリコーゲン分解↓	—	—
ホスホフルクトキナーゼ-1	—	↑	グルコース利用↑	フルクトース-2,6-ビスリン酸	グルカゴン、クエン酸
ホスホフルクトキナーゼ-2	脱リン酸化	↑	フルクトース2,6-ビスリン酸	—	—
フルクトース1,6-ビスホスファターゼ	脱リン酸化	↓	糖新生↓	—	—
ビルピン酸キナーゼ	脱リン酸化	↑	グルコース利用↑	フルクトース-1,6-ビスリン酸	グルカゴン、ATPなど
グルコキナーゼ	—	↑	グルコース利用↑	—	—

↑ : 増加、亢進 ↓ : 減少

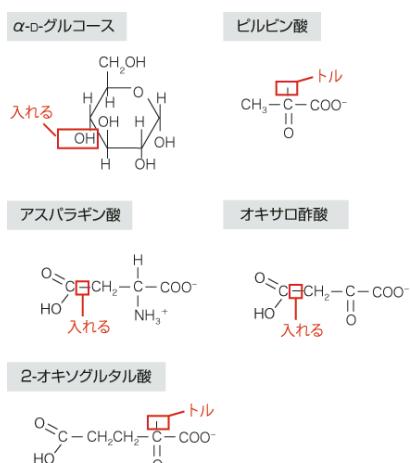
※9 (×)

(○)

種類	
糖原性アミノ酸	Gly · Ser · Ala · Thr · Cys · Met · Val · His · Arg · Pro · Asp · Glu · Asn · Gln
ケト原性アミノ酸	Leu
糖原性かつケト原性アミノ酸	Trp · Phe · Tyr · Lys · Ile

種類	
糖原性アミノ酸	Gly · Ser · Ala · Thr · Cys · Met · Val · His · Arg · Pro · Asp · Glu · Asn · Gln
ケト原性アミノ酸	Leu · Lys
糖原性かつケト原性アミノ酸	Trp · Phe · Tyr · Ile

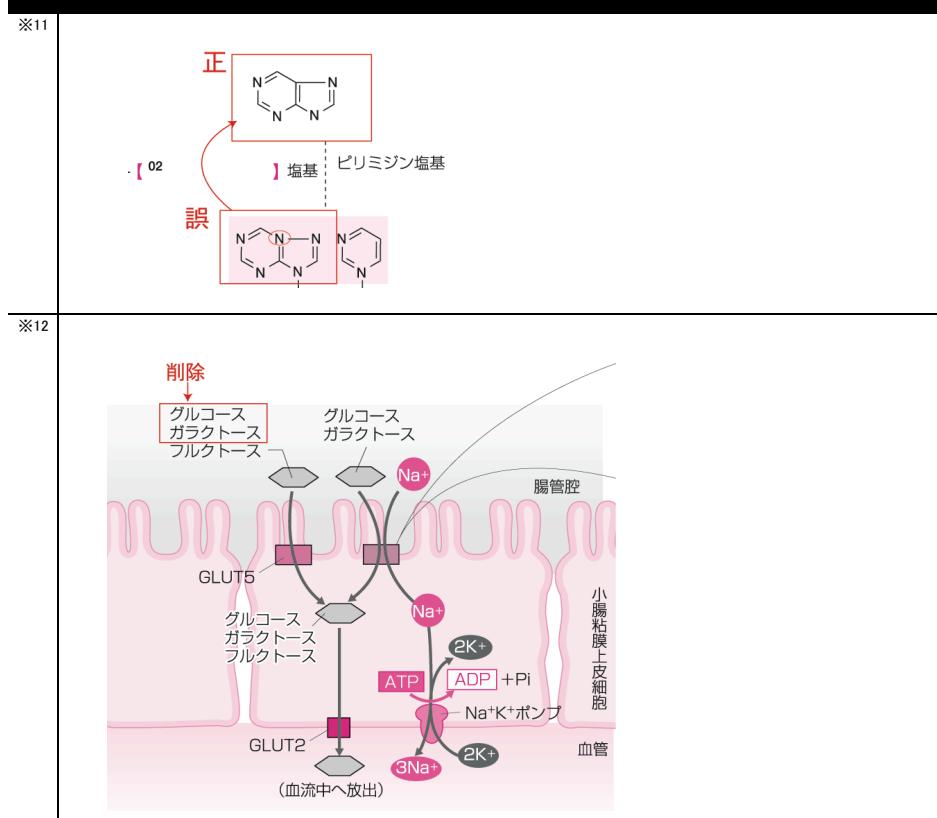
※10



■第3刷(2009年2月20日発行)をおもちの方が必要な修正箇所

頁	場所	誤	正	補足	掲載
15	上から5つ目の●	不飽和脂肪酸とコレステロールは生体膜の[07]を低くする	生体膜中のコレステロールは生体膜の[07]を調節している		11/08/26
51	図1	「N」をとる		※11参照	11/08/26
67	図1	「グルコース」と「ガラクトース」を削除		※12参照	11/08/26
83	表2			※2参照	11/08/26
102	「学習のポイント1」タ	タンパク質は消化管でアミノ酸までに加水分解され吸収される。	タンパク質は消化管で分解されてアミノ酸やジ・トリペプチドとして吸収される。		11/08/26
103	4つ目の●	●タンパク質は消化管で消化を受け、2分子のアミノ酸が結合した[13]にまで消化されても吸収はできない。アミノ酸になつてはじめて吸収できる。この最後の消化と吸収が同時に行われることを[14]といつ。	タンパク質は消化管で分解され、2分子のアミノ酸が結合した[13]として吸収される場合もある。消化の最後の過程である[14]では消化分解と吸収が同時に進行する。		11/08/26
104	「学習の前に」3行目	純粋なケト原性アミノ酸はロイシンだけである。	純粋なケト原性アミノ酸はロイシンとリジンである。		11/08/26
104	表A	「Lys」を「糖原性かつケト原性アミノ酸」から「ケト原性アミノ酸」へ移動		※9参照	11/08/26
105	6行目	●脂質代謝系だけに組み込まれるアミノ酸は[12]だけである。	●脂質代謝系だけに組み込まれるアミノ酸は[12]とリジンの2種である。		11/08/26
120	上の図:ホスホエノールビルビン酸	両図ともに、2重結合を単結合に修正		※8参照	11/08/26
124	Q2のa	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝系は～	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝達系は～	「達」が抜けていました	11/08/26
126		「 α -D-グルコース」「ビルビン酸」「アスパラギン酸」「オキサロ酢酸」「2-オキソグルタル酸」の構造式に誤りがありました		※10参照	11/08/26

図表



※2 赤枠部分を修正

糖質代謝酵素	作用	活性	結果	活性化剤	阻害剤
グリコーゲンシンターゼ	脱リン酸化	↑	グリコーゲン合成↑	グルコース 6-リン酸	グルカゴン、グリコーゲンなど
グリコーゲンホスホリラーゼ	脱リン酸化	↓	グリコーゲン分解↓	—	—
ホスホフルクトキナーゼ-1	—	↑	グルコース利用↑	フルクトース-2,6-ビスリン酸	グルカゴン、クエン酸
ホスホフルクトキナーゼ-2	脱リン酸化	↑	フルクトース2,6-ビスリン酸↑	—	—
フルクトース1,6-ビスホスファターゼ	脱リン酸化	↓	糖新生↓	—	—
ビルビン酸キナーゼ	脱リン酸化	↑	グルコース利用↑	フルクトース-1,6-ビスリン酸	グルカゴン、ATPなど
グルコキナーゼ	—	↑	グルコース利用↑	—	—

↑ : 増加、亢進 ↓ : 減少

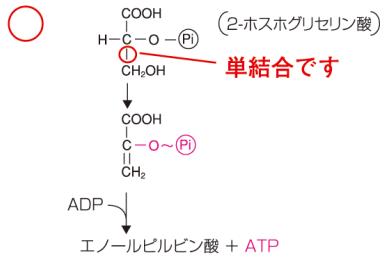
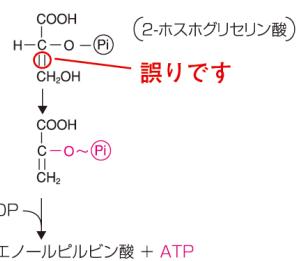
※9 (×)

(○)

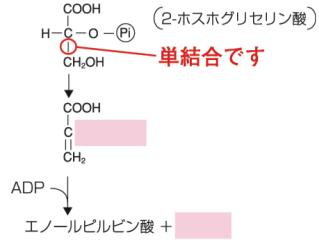
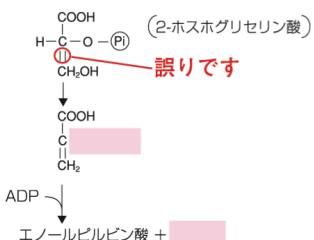
種類	
糖原性アミノ酸	Gly · Ser · Ala · Thr · Cys · Met · Val · His · Arg · Pro · Asp · Glu · Asn · Gln
ケト原性アミノ酸	Leu
糖原性かつケト原性アミノ酸	Trp · Phe · Tyr · Lys · Ile

種類	
糖原性アミノ酸	Gly · Ser · Ala · Thr · Cys · Met · Val · His · Arg · Pro · Asp · Glu · Asn · Gln
ケト原性アミノ酸	Leu · Lys
糖原性かつケト原性アミノ酸	Trp · Phe · Tyr · Ile

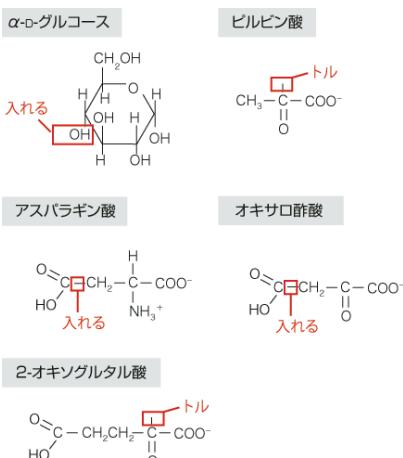
※8



×



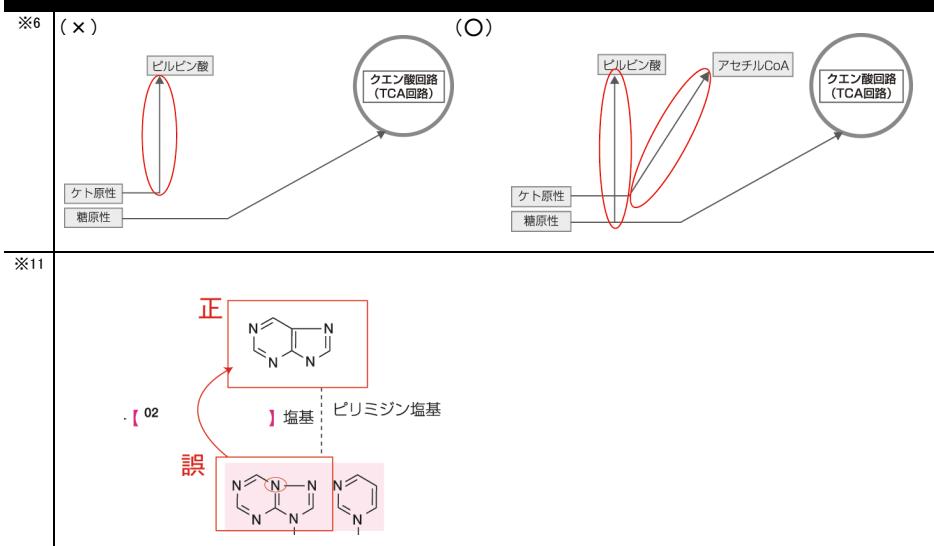
※10



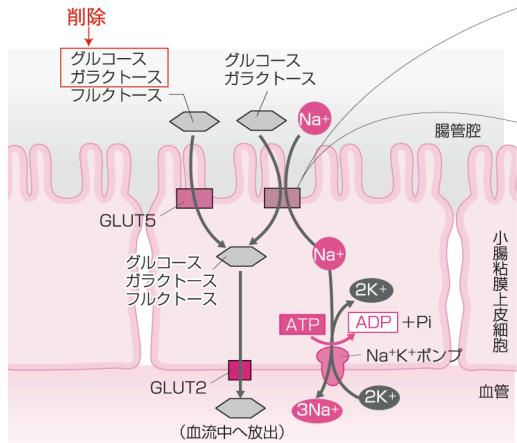
■第2刷(2008年9月1日発行)をおもちの方が必要な修正箇所

頁	場所	誤	正	補足	掲載
別冊	裏表紙の前の2頁 「主要代謝 早わかりマップ」	「ケト原性」と「糖原性」の一の行く先	※6参照		11/08/26
15	上から5つ目の●	不飽和脂肪酸とコレステロールは生体膜の[07]を低くする	生体膜中のコレステロールは生体膜の[07]を調節している		11/08/26
51	図1	「N」をとる	※11参照		11/08/26
67	図1	「グルコース」と「ガラクトース」を削除	※12参照		11/08/26
83	表2		※2参照		11/08/26
102	「学習のポイント」1	タンパク質は消化管でアミノ酸までに加水分解されて吸収される。	タンパク質は消化管で分解されてアミノ酸やジ・トリペプチドとして吸収される。		11/08/26
103	4つ目の●	●タンパク質は消化管で消化を受け、2分子のアミノ酸が結合した[13]にまで消化されても吸収はできない。アミノ酸にならなければ吸収できる。この最後の消化と吸収が同時に行われることを[14]という。	タンパク質は消化管で分解され、2分子のアミノ酸が結合した[13]として吸収される場合もある。消化の最後の過程である[14]では消化分解と吸収が同時に進行する。		11/08/26
104	「学習の前に」3行目	純粋なケト原性アミノ酸はロイシンだけである。	純粋なケト原性アミノ酸はロイシンとリジンである。		11/08/26
104	表A	「Lys」を「糖原性かつケト原性アミノ酸」から「ケト原性アミノ酸」へ移動	※9参照		11/08/26
105	6行目	●脂質代謝系だけに組み込まれるアミノ酸は[12]だけである。	●脂質代謝系だけに組み込まれるアミノ酸は[12]とリジンの2種である。		11/08/26
120	上の図:ホスホエノールビルビン酸	両図ともに、2重結合を単結合に修正	※8参照		11/08/26
124	Q2のa	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝系は~	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝達系は~	「達」が抜けていました	11/08/26
126		「α-D-グルコース」「ビルビン酸」「アスパラギン酸」「オキサロ酢酸」「2-オキシグルタル酸」の構造式に誤りがありました		※10参照	11/08/26
130	図3	一番下は「乳酸」ではなく「アラニン」の間違いでした	※7参照		11/08/26

図表



※12



※2 赤枠部分を修正

糖質代謝酵素	作用	活性	結果	活性化剤	阻害剤
グリコーゲンシンターゼ	脱リン酸化	↑	グリコーゲン合成↑	グルコース 6-リン酸	グルカゴン、グリコーゲンなど
グリコーゲンホスホリラーゼ	脱リン酸化	↓	グリコーゲン分解↓	—	—
ホスホフルクトキナーゼ-1	—	↑	グルコース利用↑	フルクトース-2,6-ビスリン酸	グルカゴン、クエン酸
ホスホフルクトキナーゼ-2	脱リン酸化	↑	フルクトース2,6-ビスリン酸↑	—	—
フルクトース1,6-ビスホスファターゼ	脱リン酸化	↓	糖新生↓	—	—
ビルピン酸キナーゼ	脱リン酸化	↑	グルコース利用↑	フルクトース-1,6-ビスリン酸	グルカゴン、ATPなど
グルコキナーゼ	—	↑	グルコース利用↑	—	—

↑ : 増加。亢進 ↓ : 減少

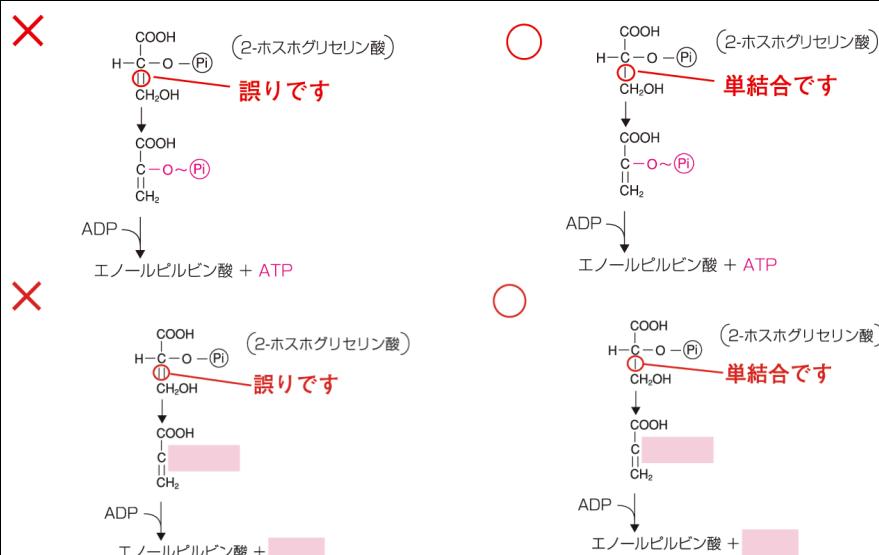
※9 (×)

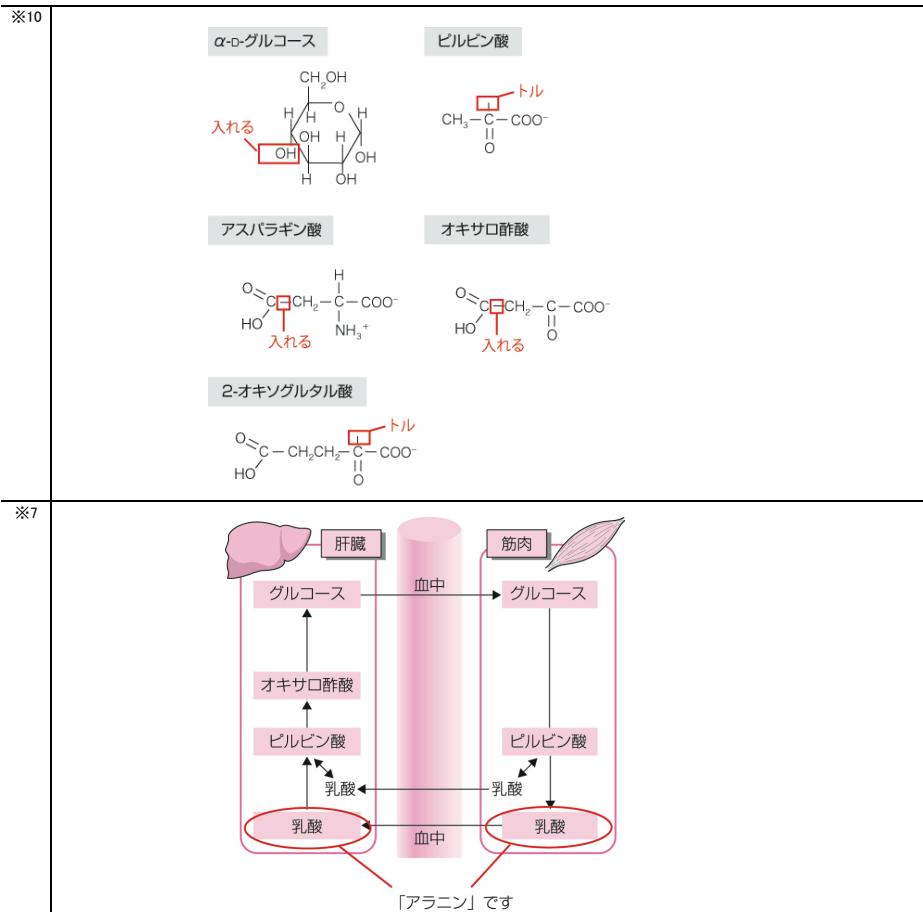
(○)

種類	
糖原性アミノ酸	Gly・Ser・Ala・Thr・Cys・Met・Val・His・Arg・Pro・Asp・Glu・Asn・Gln
ケト原性アミノ酸	Leu
糖原性かつケト原性アミノ酸	Trp・Phe・Tyr・Lys・Ile

種類	
糖原性アミノ酸	Gly・Ser・Ala・Thr・Cys・Met・Val・His・Arg・Pro・Asp・Glu・Asn・Gln
ケト原性アミノ酸	Leu・Lys
糖原性かつケト原性アミノ酸	Trp・Phe・Tyr・Ile

※8





■第1刷(2007年11月15日発行)をおもちの方が必要な修正箇所

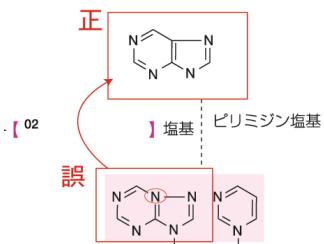
頁 別冊	場所	誤	正	補足	掲載
	裏表紙の前の2頁 「主要 代謝 早わかりマップ」	「ケト原性」と「糖原性」の一の行く先		※6参照	11/08/26
15	上から5つ目の●	不飽和脂肪酸とコレステロールは生体膜の[07]を低くする	生体膜中のコレステロールは生体膜の[07]を調節している		11/08/26
19	memo9行目	アルトース	アルドース	「ト」「ド」に	11/08/26
20	図1「六炭糖」の1番右側			※1参照	11/08/26
22	上から11行目【08】の後	多糖ある	多糖である	「で」を加える	11/08/26
28	表1 2複合脂質の3行目、 B.糖脂質	グリセロリン脂質、スフィンゴリン脂質	グリセロ糖脂質、スフィンゴ糖脂質	「リン」を「糖」に	11/08/26
38	左側解答欄	08 色素	08 ヘム		11/08/26
51	図1	「N」をとる		※11参照	11/08/26
60	Coffee Break 5行目	ブロテイルグルタミ酸	ブテオイルグルタミ酸	「ロ」と「テ」が逆でした	11/08/26
61	表2 4段目「ナイアシン」の行、3列目 「補酵素型」	ニコチニアミドアデニジヌクレオチド (NADP)	ニコチニアミドアデニジヌクレオチド 酸(NADP)	「リン酸」加える	11/08/26
67	図1	「グルコース」と「ガラクトース」を削除		※12参照	11/08/26
70	下から5行目	フルクトース1-リン酸	フルクトース6-リン酸	「1」を「6」に	11/08/26

81	解答欄の14	細胞質 ゲル	細胞質 ジル		11/08/26
83	表2			※2参照	11/08/26
83	表3			※3参照	11/08/26
102	「学習のポイント」1	タンパク質は消化管でアミノ酸までに加水分解されて吸収される。	タンパク質は消化管で分解されてアミノ酸やジ-トリペプチドとして吸収される。		11/08/26
103	4つ目の●	●タンパク質は消化管で消化を受け、2分子のアミノ酸が結合した【13】にまで消化されても吸収はできない、アミノ酸にならぬしてはじめて吸収できる。この最後の消化と吸収が同時に進行する。	タンパク質は消化管で分解され、2分子のアミノ酸が結合した【13】として吸収される場合もある。消化の最後の過程である【14】では消化分解と吸収が同時に進行する。		11/08/26
104	「学習の前に」3行目	純粋なケト原性アミノ酸はロイシンだけである。	純粋なケト原性アミノ酸はロイシンとリジンである。		11/08/26
104	表A	「Lys」を「糖原性かつケト原性アミノ酸」から「ケト原性アミノ酸」へ移動		※9参照	11/08/26
105	6行目	●脂質代謝系だけに組み込まれるアミノ酸は【12】だけである。	●脂質代謝系だけに組み込まれるアミノ酸は【12】とリジンの2種である。		11/08/26
120	上の図:ホスホエノールビルビン酸	両図ともに、2重結合を単結合に修正		※8参照	11/08/26
124	Q2のa	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝系	ミトコンドリア外膜に存在する電子伝達系	「達」が抜けていました	11/08/26
126		「α-D-グルコース」「ビルビン酸」「アラバミン酸」「オキサロ酢酸」「2-オキシグルタル酸」の構造式に誤りがありました		※10参照	11/08/26
130	図3	一番下は「乳酸」ではなく「アラニン」の間違いでした		※7参照	11/08/26
132	Q4	Q4 代謝に関する以下の記述で正しいのはどれか。	Q4 代謝に関する以下の記述で誤っているのはどれか。		11/08/26
135	図B	アデニンの構造式が違っています		※4参照	11/08/26
136	アデニンの構造式	アデニンの構造式が違っています		※5参照	11/08/26
171	10行目	タンパク質リン酸酵素	タンパク質リン酸化酵素	「化」を加える	11/08/26
172	表1	トリヨードチロシン	トリヨードチロニン	「シ」を「ニ」に	11/08/26
173	8行目	トリヨードチロシン	トリヨードチロニン	「シ」を「ニ」に	11/08/26
173	解答欄	13 子宮収縮作用	13 子宮収縮	「作用」を削除	11/08/26
別冊2	左段上から2行目	内膜、中膜、外膜の二重の膜構造	内膜、外膜の二重の膜構造	「中膜」を削除	11/08/26
別冊6	A5	d. アロステリック酵素は、活性部位以外はないがアロステリック部位があり	d. アロステリック酵素は、活性部位以外にアロステリック部位があり		11/08/26

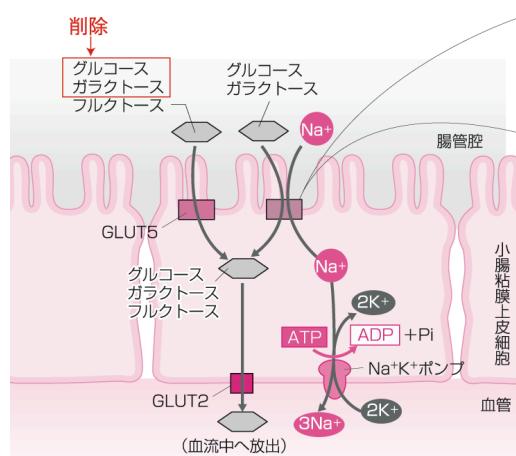
図表

※6	(×)		(○)	
※1	(×)		(○)	

※11



※12



※2 赤枠部分を修正

糖質代謝酵素	作用	活性	結果	活性化剤	阻害剤
グリコーゲンシンターゼ	脱リン酸化	↑	グリコーゲン合成↑	グルコース 6-リン酸	グルカゴン、グリコーゲンなど
グリコーゲンホスホリラーゼ	脱リン酸化	↓	グリコーゲン分解↓	—	—
ホスホフルクトキナーゼ-1	—	↑	グルコース利用↑	フルクトース-2,6-ビスリン酸	グルカゴン、クエン酸
ホスホフルクトキナーゼ-2	脱リン酸化	↑	フルクトース2,6-ビスリン酸↑	—	—
フルクトース1,6-ビスホスファターゼ	脱リン酸化	↓	糖新生↓	—	—
ビルビン酸キナーゼ	脱リン酸化	↑	グルコース利用↑	フルクトース-1,6-ビスリン酸	グルカゴン、ATPなど
グルコキナーゼ	—	↑	グルコース利用↑	—	—

↑：増加、亢進 ↓：減少

※3 赤枠部分を修正

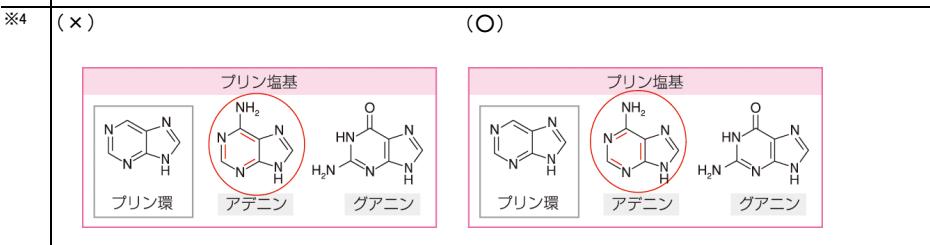
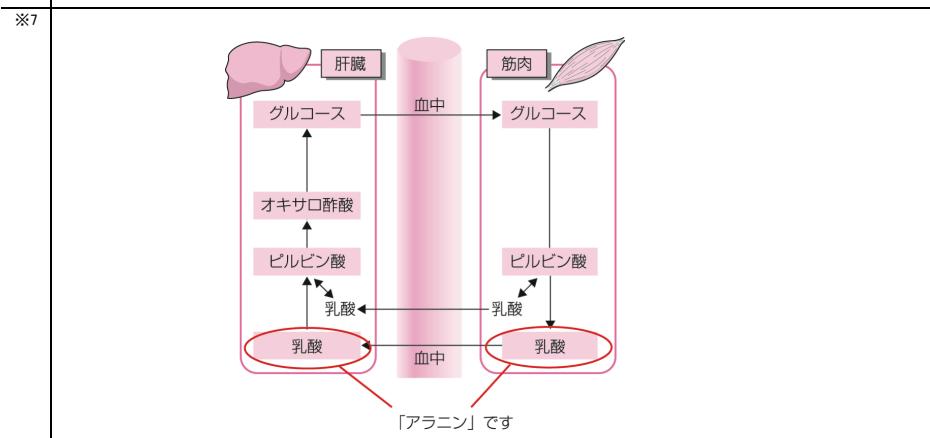
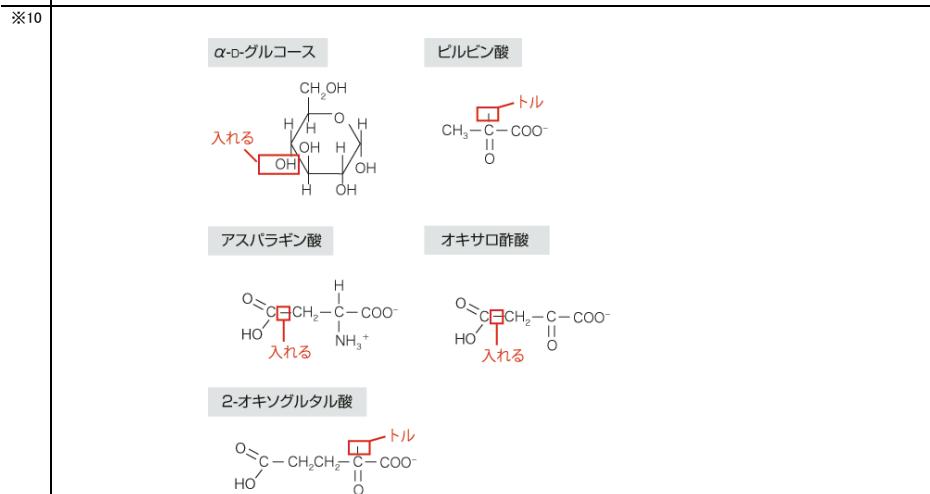
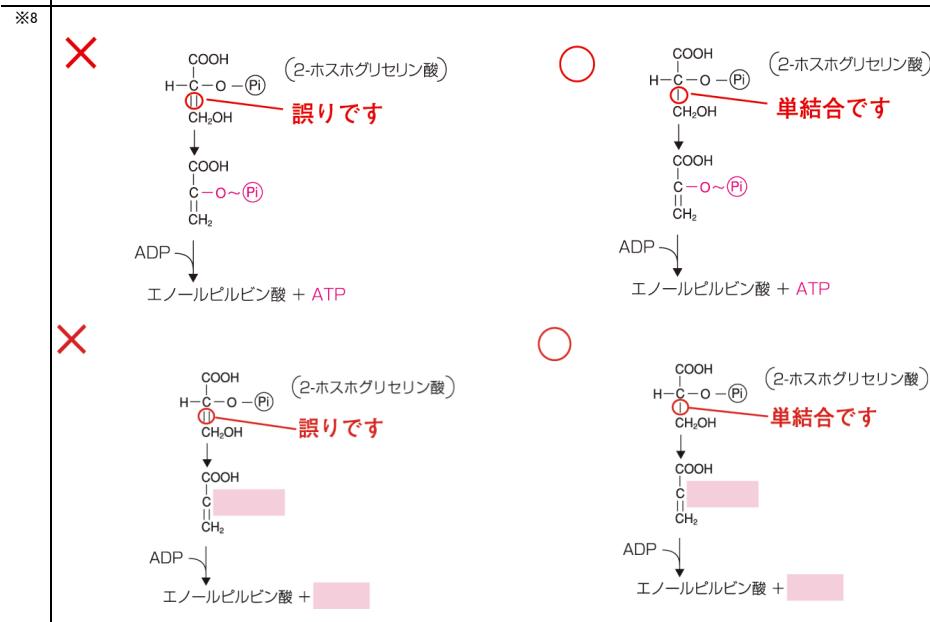
糖質代謝酵素	作用	活性	結果	栄養状態による活性変化	
				糖質摂取	飢餓および糖尿病
グリコーゲンシンターゼ	リン酸化	↓	グリコーゲン合成↓	↑	↓
グリコーゲンホスホリラーゼ	リン酸化	↑	グリコーゲン分解↑	↓	↑
ホスホフルクトキナーゼ-1	—	↓	グルコース利用↓	↑	↓
ホスホフルクトキナーゼ-2	リン酸化	↓	フルクトース2,6-ビスリン酸↓	—	—
フルクトース1,6-ビスホスファターゼ	リン酸化	↑	糖新生↑	↓	↑
ビルビン酸キナーゼ	リン酸化	↓	グルコース利用↓	↑	↓
グルコキナーゼ	—	↓	グルコース吸収↓	↑	↓

↑：増加、亢進 ↓：減少

※9 (x) (○)

種類	
糖原性アミノ酸	Gly・Ser・Ala・Thr・Cys・Met・Val・His・Arg・Pro・Asp・Glu・Asn・Gln
ケト原性アミノ酸	Leu
糖原性かつケト原性アミノ酸	Trp・Phe・Tyr・Lys・Ile

種類	
糖原性アミノ酸	Gly・Ser・Ala・Thr・Cys・Met・Val・His・Arg・Pro・Asp・Glu・Asn・Gln
ケト原性アミノ酸	Leu・Lys
糖原性かつケト原性アミノ酸	Trp・Phe・Tyr・Ile



(x)

(O)

